

研究ノート

新出写本『四十二の物あらそひ』の紹介と翻刻（その2）

吉海直人

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・特任教授

A Bibliographical Introduction to
“Shijyunimonoarasoi” Vol.2

YOSHIKAI Naoto

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Special appointment professor

【要旨】

先に『小町業平歌問答』について論じた。その際、『四十二の物あらそひ』との類似を指摘しておいた、今回紹介する『四十二の物あらそひ』の新出写本は、書写年代こそ近世後期と下るものの、和歌数が揃っていること、また加藤千蔭の本を写したという奥書が存することに価値が認められる。なお補注として「優劣歌問答」の歴史的変遷にも触れておいた。

【解題】

かつて『四十二の物あらそひ』は、室町時代物語・御伽草子のジャンルに分類されていたが、むしろ「論春秋歌合」を継承する歌問答（優劣論）の一種とみるべきではないだろうか。もちろん一般的な歌合と違って、たとえば春と秋とどちらがいいかという問いに答える趣向なので、実のところ歌そのものの良しあしは問われていない。厳密に言えば、歌合とは別種ということになる。

それもあって『小町業平歌問答』の先行作品として、以前に『源氏物語』と関連の深い『四十二の物あらそひ』の新出写本を紹介した¹⁾。ただしそれは所収和歌に欠落があったので、今回は改めてきちんと四十二首の歌が揃っている新出写本を紹介したい。

なお『四十二の物あらそひ』は、和歌による優雅な宮廷の遊びという内容なので、絵を伴った豪華絵巻や絵本にも仕立てられている（歌仙絵のようなものもある）。また古活字本をはじめとして貞享二年本・元禄五年本などの版本も存しているので、たくさん現存している江戸後期の写本など、たいした価値は認められそうもない（伝本の総数は軽く五十を超える）。

ただし諸本に和歌や本文異同、詠者の名前の異同や有無、あるいは

歌の順番の違いなどが少なからず認められる。それが『四十二の物あらそひ』の特徴であるとする、単なる書写上の誤写というのではなく、書写者による創作・取捨選択・書き換え・書き加えなども多分に含まれているのではないだろうか。「一と一」という対照的な題など、容易に増補・変形できるものだからである。それが諸本分類を困難なものにしている最大の原因ではないだろうか。

そういった広がりを経合的に把握するためには、価値の低い写本まで含めて、とにかく数多く収集し、総合的に分析することが必要である。ということ、本書にも多少の資料的価値は認められよう。

ここで簡単に本書の書誌を紹介しておきたい。影月堂文庫蔵近世後期写本。料紙は楮紙。丁数は全二十二丁。表紙・裏表紙ともに本文共紙。装丁は仮綴じ。寸法はタテ25.2cm×ヨコ17.4cm。表紙中央に「四十二の物あらそひ」と直書きされている（題簽なし）。本文は二丁表から始まっている。一面六行書きを原則とするが、題詞が入った場合に七行書きになっているものもある。

全体に虫損が多い。本書の最大の特徴は、墨及び朱で本文校訂が施されていることである。末尾の奥書に「この墨には芳宜園の大人の青墨にてしるされたるをうつせる也」とあるので、本文は芳宜園の大人（加藤千蔭）直筆の本を写したもののようである。

また朱筆で「この朱墨もてかたはらにしるせるは貞享二乙丑三月の印本もてかんがへ合するなり」とあるので、本文に朱で貞享二年版本との本文異同が書き込まれていることになる。それ以外に、墨で仮名の違いなども書き入れられている。ただし今回の翻刻では、煩雑になるのを避けるため、墨及び朱筆校訂部分の翻刻は省略している。

なお本書の内容は、かつて石川徹氏が紹介された二本の写本のうちの後者に類似した写本であることがわかった（2）。石川氏所蔵のものは文化二年写という奥書を有しているが、本書が加藤千蔭（一七三五〜一八〇八）の本を写したものとすれば、書写年代も文化頃となり

そうである。それを含めて両書は同系統本と見てよからう。両書の本文を比較することによって、相互に補い合えるところもありそうだ。また貴族から町人への享受の広がりも認められる。

【注】

(1) 吉海直人「新出写本『四十二の物あらそひ』の紹介と翻刻」同志社女子大学総合文化研究所紀要29・平成24年3月

(2) 石川透氏「『四十二の物あらそひ』二本解題・翻刻」三田国文29・平成11年3月

【補注】優劣問答について

和歌による優劣論争の起源は、額田王の長歌、

冬ごもり春さり来れば（中略）秋山の木の葉を見ては（中略）秋

山ぞ我は

〔万葉集〕一六番

に求められる。ただしこれは単発的なものに終わっている。それが平安時代に至ると、六歌仙の一人である大友黒主と滋賀豊生の『論春秋歌合』を経て広まっていた。また『拾遺集』雑下巻頭は紀貫之の、

あるところに、春秋いづれかまさる、ととはせ給けるにのみ
てたてまつりける

春秋に思みだれてわきかねつ時につけつゝうつる心は

（五〇九番）

から始まっている。それに対して貫之はどちらかには定めがたいと述べている。同様に大納言朝光も、

円融院のうへ、鶯と郭公といづれかまさると申せ、とおほせ
られければ、

折からにいづれともなき鳥の音もいかゞさだめむ時ならぬ身は

（五一二番）

と定められないと詠じている。

それに対して元良親王及び五一三番から五二三番までは、問いと答えの歌が続いている。

元良のみこ承香殿のとしこに、春秋いづれかまさる、ととひ
侍ければ、秋もをかしう侍り、といひければ、おもしろき桜
を、これはいかゞ、といひて侍ければ、

おほかたの秋に心はよせしかど花見る時はいづれともなし

(五一〇番)

題しらず よみ人しらず

春はたゞ花のひとつへにさく許物のあはれは秋ぞまされる

(五一一番)

これらは問いも和歌の形式になっている。中でも五一三番から五二三番までは原則伊衡（いへい）が問いの歌を詠み、それに対して躬恒・忠岑が答えの歌を詠んでいる形式で統一されており、これを切り出せば一種の文芸作品（歌問答）として十分通用する。^①

続く『後拾遺集』には源為善の、

花盛り春の山辺のあけぼのに思ひ忘るな秋の夕暮（一一〇三番）

が出ている。ここで「春のあけぼの」と「秋の夕暮」が対になっているのは、『枕草子』初段の引用と見てよさそうである。というより、『後拾遺集』に至って、ようやく「春のあけぼの」や「秋の夕暮」が歌語として勅撰集に登場した。ただしこれは優劣論として詠まれたものではなく、亡くなった中宮のことを忘れないでほしいという歌であった。こういった春秋優劣問答の流行は、自ずから『源氏物語』の六条院造宮にも影を落としている。もちろん春秋以外に、既に『後撰集』にはやはり元良親王の問答歌として、

あひしりて侍ける人のもとに、返事みむとてつかはしける

元良のみこ

来や来やと待つ夕暮と今はとて帰るあしたといづれまされる

返し

(五一〇番)

藤原かつみ

夕暮は松にもかかる白露のをくる朝やきえははつらめ

(五一一番)

が掲載されている。もちろん「帰るあした」がまさっているのだが、「いづれまされる」に対して「一ぞまされる」という形式は踏襲していない。

この歌は『栄花物語』ひかげのかづら巻にも、

まづは陽成天皇の御子たち、いみじうすきをかしうおはしまして、
かく、

来や来やと待つ夕暮と今はとてかへる朝といづれまされり

といふ歌を、知り通ひたまひける所どころに遣はしたりければ、

本院の侍従といふ人、かくぞ聞えたりける。

夕暮は頼む心になくさめつ帰る朝は消ぬべきものを

(①500頁)

と再録されている。ただし『後撰集』の答えは藤原かつみであったが、『栄花物語』では本院侍従の答えとなっている。

同様の優劣問答として、『躬恒集』には凡河内躬恒と壬生忠岑の例が出ている。これは『拾遺集』の延長線上なのであろうか。

みつね

あはむとて待つ夕暮と夜をこめて行く暁といづれまされり

(躬恒集Ⅲ二四四)

ただみね

待つほどは頼みも深し夜をこめて起きて別れることはまされり

(躬恒集Ⅲ二四五)

ここでも躬恒は男女の逢瀬について、「待つ夕暮」と「行く（帰る）暁」とどっちが（辛さが）優っているのかを問い、それに忠岑が歌で「行く暁」が勝っていると答えている。問いが「いづれまされり」と

あり、それに「別れることはまさされり」と答えているのだから、こちらの方がより問答形式を踏襲していることになる（贈答しやすい）。そのバリエーションとして、『和泉式部日記』の贈答もあげることができる。

宵ごとに帰しはすともいかでなほあかつき起きを君にせさせ
じ（女）

苦しかりけり」とあれば、

朝露のおくる思ひにくらぶればただに帰らん宵はまさされり（宮）

（32頁）

先の問答では女性の立場から答えていたが、『和泉式部日記』では男性の立場で宮が答えている。男女の違いこそあれ、日記は『後撰集』の優劣論を踏まえていると見てもよさそうである。ただし和泉式部は「いづれまさされる」とはいつておらず、「暁起き」をさせたくないといっているだけである¹⁾。

さらに『平家物語』第五巻「月見」には、待宵の小侍従の話として、待宵の小侍従といふ女房も、此御所にぞ候ひける。この女房を待宵と申しける事は、或時御所にて、「待つ宵、帰る朝、いづれかあはれはまさされる」と御尋ねありければ、

待つ宵のふけゆく鐘の声きけばかへるあしたの鳥はもののかは

とよみたりけるによつてこそ、待宵とは召されけれ。（358頁）と出ている（『新古今集』一一九一番にもあり）。こちらでは贈答ではなく、待つ宵がまさっているとしている。

こうしてみると、『古今集』に優劣問答は取り入れられていないものの、撰者である紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の三人までもが優劣問答に加担していることがわかる。それが『拾遺集』に至って勅撰集に採録されることで市民権を得ている。そういつたことが後に『四十二の物あらそひ』や『小町業平歌問答』として醸成されたわけである。ただし問いと答えという一対の贈答形式は踏襲されず、詞書的な問

いに対して歌で答える方が採用されている。本来、小町・業平の問答であれば、当然業平の歌もあつてしかるべきだろうが、業平は問いを発するだけの役割にとどまっておき、物足りなさを禁じ得ない。いずれにせよ平安時代に既にこういつた土壌ができていたのであるから、それを作品化するのにはさほど難しいことではなかったであろう。

【注】

（1）菊地靖彦氏「躬恒・忠岑・伊衡問答歌について」和歌文学研究29・昭和48年6月、工藤重矩氏「躬恒・忠岑問答歌」福岡教育大学紀要文科編25・昭和51年2月、徳原茂実氏「古今撰者時代の私的歌会」国文論叢9・昭和57年3月参照。

（2）吉海「仮名表記で活性化した和歌・物語——『和泉式部物語』を読み直す

——『物語における和歌とは何か』（武蔵野書院 令和2年9月参照）。

【翻刻】

四十二のものあらそひ（1才）（1ウ白紙）

むかしならのみかどの御ときや、折ふしとうぐうの御方へならせおはします。二月中の六日の比なるに、なんでんのさくらは夕ばへにあかぬ色をそへ、みぎはの柳はもへぎのいとをみだしたるかとうたがはれ、よろづながめおはし」（2才）ます。とうぐうに仰らるゝは、春と秋と何れをとらぬことなれども、猶ものゝあはれをとゞめ、ことにふれてかなしきは秋の夕にぞ侍りける。もろこしには春をあはれみわが国は秋をあはれむとこそ見えて侍れ。いかにさため仰らるゝにやと仰ければ」（2ウ）中宮の御かたよりみどりのうすやうに、

大かたはあらそふ比としりながら心ひとつを秋にさだめむ（一）

と遊して、小じょうの君して奉り給ふ。御門是を御らんじて、女ばうは秋をあはれむことまこととてわらはせおはします。」(3オ)うへもいつよりもつれづれに覺しめすほどなれば、是をはじめとして四十二ものあらそひあるべしとて、御前にさぶらはぬないしのすけなどめんくゝに御使にて有ければ参り給ふ。いろくゝのうすやうどもにさまぐゝの事をあそばして中ぐうの御かたを」(3ウ)はじめとして、今四十一なればくぎやうてん上人女ほうたちもかほうちあかめさぶらひ給ふ。

上より、
月の夜と 雪の朝と

ふる雪はつもらぬかけもあり明の月ぞくまなき冬の山ざと」(二) (4オ)

東宮の御かたより

にし山と ひがし山と

月かげの出つる山もわすられて入かたにすむ我ころかな」(三) 東宮の御母きさいの宮より

しぐれと」(4ウ) 松かぜと

わきて猶あはれなりしを松かぜの時雨のをとにかよはざりせば」(四) 兵部卿の宮より

ころもうつをと、 夜ふねこぐと

ころも打やどにはゆめもかよひけりねられぬものは夜ふねこぐをと」(五) (5オ)

御門の御をと、中務の宮より

やまひにくすりを得たと こひしき人にあへると

うれしさはいづれも同じ色なれど恋しきかたにひくころかな」(六) 弘徽殿の女御より

かぜになみよる柳と 露にしほるゝすゝきと」(七) (5ウ)

青柳のかげふむ道にやすらはんまねくすゝきはさもあらばな」(あ)

れ(七)

清涼殿の女御より

おぎと はぎと

むらさきの露もあだなるながめより身にしむものはおぎのうは風」(八) (6オ)

桐つぼのみやす所より

てと うたど

はま千どりそれとも見えぬあとぞうきわかこのうらにはまよひはつとも」(九)

皇后の宮より

かひおほひと てまりと」(6ウ)

くろかみのみだれてさはぐまりよりもかひにをほへる袖ぞなつかし」(十)

東宮の御おほぢ右のおと、

うぐひすと ほとゝぎすと

うぐひすのさへづる春のあしたよりなほめづらしきほとゝぎすかな」(十一) (7オ)

大将

うとまるゝ身と あかぬわかれと

かはる身はうき慰むかたもありあかぬわかれのみちぞ悲しき」(十二)

関白の御ちやくし平大納言殿

あか月の恋と タべのおもひと」(7ウ)

あか月の袂の露もかずならずタベの袖のぬるゝけしきは」(十三) 二条の中納言

えだに色こきもみちと 淋しき庭の落葉と

紅葉はをさそふあらしもつらからず庭のにしきにしくものはなし」(十四) (8オ)

九条の宰相

みめと しほと

しほやかぬうらぞ寂しきからさきの松のすがたも何にかはせん(十
五)

宰相の中将

みめのよきと ありかのあると(8ウ)

かつらぎの神はよるともちぎりけりしらすありかをつゝむならひ
は(十六)

近衛の大将

花と 紅葉と

もみぢばのちりゆく秋の夕べより花にもうきかぜをうらみん(十
七)(9オ)

三位の中将

たのめてとはぬ夕暮と かへるあしたのなごり

あか月のわかれの袖の露よりもとはぬうらみぞやるかたもなき(十
八)

頭の中将

うらみあると 思へども叶はぬと(9ウ)

ながらへばせめて逢ふせもありぬべしおもはぬ人をまつぞ苦しき
(十九)

六条院の中納言

菊と 梅と

白きくはうつろふ色を見るもうしのきばの梅のかをやしのばん(二
十)(10オ)

四位の少将

みねにさげぶさると 鹿のなくねと

うきことはましろの声に聞そへてつまどふ鹿のねこそつらけれ(二
十一)

右門の督

みねにわかるゝよこ雲と とふさとのけぶりと(10ウ)

とを里のひとすじたてる夕けぶりみねゆく雲にまがふものかは(二
十二)

五条の宰相

ゆめと 文と

はかなしや稀にまちみる玉づさはみし夜の夢を何にかはせん(二
十三)(11オ)

花山院の侍従の君御年十一にて

いはねの松と 軒のしのぶと

さびしさはいはねのまつやまさるらんのおしのは見なれて(二
十四)

常盤の大将

上陽人が恨みと 王昭君が悲しみと(11ウ)

なげき行道の草ばの露よりもまだ打雨やそでぬらすらん(二十五)

堀川の大將

しうとめと まゝはゝと

むさし野ゝゆかりのくさもつらけれどなほうきものはおやならぬ
おや(二十六)(12オ)

中宮のしうと

しほ焼の翁と つりするあまと

しほがまの烟になるゝ衣よりつりするあまや袖ぬらすらん(二
十七)

内侍のかみ

女郎花と なでしこと

おみなへししほるゝ野べにまじれどもなをうとまるゝやまとなで
しこ(二十八)(12ウ)

〈名前なし〉

雲のかりと みぎはのをしと

はかなしやみぎはのをしのうき枕雲井の雁におよぶべきかは（二十九）

〈名前なし〉

逢てあわぬ恋と ひたすら逢ざる恋と

逢みての後の心にくらぶればむかしはものをおもはざりけり（三十）

〈名前なし〉

ふぢと やまぶきと」（13才）

池水のそこさへにはふ藤なみにたとへて見じはきしの山吹（三十一）

〈名前なし〉

卯の花と つばきと

玉つばきやちよふりたる色みへてよをうの花もなにゝかはせむ（三十二）

かやうにあらそひ遊しける所にみんのさいしやうまいり給ひて、此よしをそうし」（13ウ）給ひければ、とりあへずによろあんどもにわたらせおはします。御かど思ひもよらぬ只今のぎやうかう何事にかとおどろきおはしましけるに、つれづれに侍る折ふしかゝる御遊びと承はりてまいり侍と仰らるゝ。いまだ神の御あらそひは侍らずとて」（14才）

伊勢と 加茂と

久かたの天てる月のひかりよりあらそうものはかものみづがき（三十三）

〈名前なし〉

やはたと 熊野と

いわしみづ清きながれもわすれねど身にしむものはみくま野のうら（三十四）

〈名前なし〉

らいさんと せつぼうと」（14ウ）

なむちらんよりすぢりたる声よりもおほどかなれやていしていきん（三十五）

其後御かどより仰らるゝは、みめよくしなたかき上らうのよもぎかむぐらにとぢられて浅ましくすたれて、なぐさむものとはくわんげんをしうたをよみて」（15才）日を暮たへがたからんと又としより老たる翁のせにのうへにたはらによりくかゝりておきながものこそわざがものよとわなゝきふるはんといづれなるべき。若き女房の御方へとて御すぢり下りければ、ないしのすけとて中宮の御かたの女ぼう」（15ウ）

あじきなしとみの小川の流れよりこけむすやどの月をながめん（三十六）

かうきでんのみくしげどの同じ心を

流れあるとみの小川にすみなれてこけむす宿はよそにながめん（三十七）

源氏の女三の宮かしは木の右衛門督の」（16才）文をしとねの下より見付られてあさましきと又うきふねの兵部卿の御事をかほる大将にしたら奉りてすへの松やまとかきつかはされたりしこゝると何れがつかかりける

〈名前なし〉

うきふねの身をこがしけるおもひより」（16ウ）しとねの下にし

くものぞなき（三十八）

おほろ月夜の内侍のかみにこうきでんのほそ殿にて逢そめし源氏のこゝろとおちばの宮に夕霧の大将のおのにて見そめしわりなさとはいづれなるべしとおふせけるとなん」（17才）

東宮の御めのご大納言のきみ

おきそめし落葉がうへの露よりもおほろ月夜のかげぞ恋しき（三十九）

〈名前なし〉

手のよからんと 詞のたらひたらんと

しき鳥や大和ことばのあれぬればよるかひもなし水くきのあと(四
十)

〈名前なし〉

愛と すがたと(17ウ)

よそに見る花のすがたを忍びても逢みぬことぞしづこゝろなき(四
十一)

柏木の衛門のかみのむなしくなりしおもひと 有明の大将の山ふかき
悲しさと

〈名前なし〉

おもひ入月はこん衣(夜)を頼むともきえしけぶりの行かたぞな
き(四十二)(18オ)

これまで四十二首になりぬれば色々にさだめおわします。中にもとき
はの大将の上陽人がうたにはまづ点じかゝりけるべくけりべき十一首
にてんかけおはします。そのうち御さかづき上りけるに十六夜の月な
れば、やう／＼すみのぼり(18ウ) けるにいろ／＼の御ぞ色々な
をしかりぎぬのすがたにて、とり／＼にひきものふきもの給りて、遊
しけり。中宮の御かた只今二十一にならせをします。しろき御こそ
でに柳のいろのきぬおかしげに着なし給ひてさうの御琴に(19オ)
よりいさせおわします。唯ならぬことにてこのころさとへいでおはし
ますべきを、御門はあかずかなしく覚しめしけり。兵衛の君なをしけ
さうはなやかにて、よこぶゑふき給ふ御さまうつくしともおろかなら
ぬは、中宮の御かたによくかよひ(19ウ) けることはりなりと御門
は御覧じける。御門は御琵琶、院の御かたわごん、りちのしらべにて
をりおもしろくきこゆるに、右のおほいどの御子あさくらうたひてさ
うがし玉ふ。東山院の御子小侍従のきみいまだわらはすがたにてひち
りき(20オ) 吹給ふ。女院のくれないの御きぬかづけさせ給ひけり。

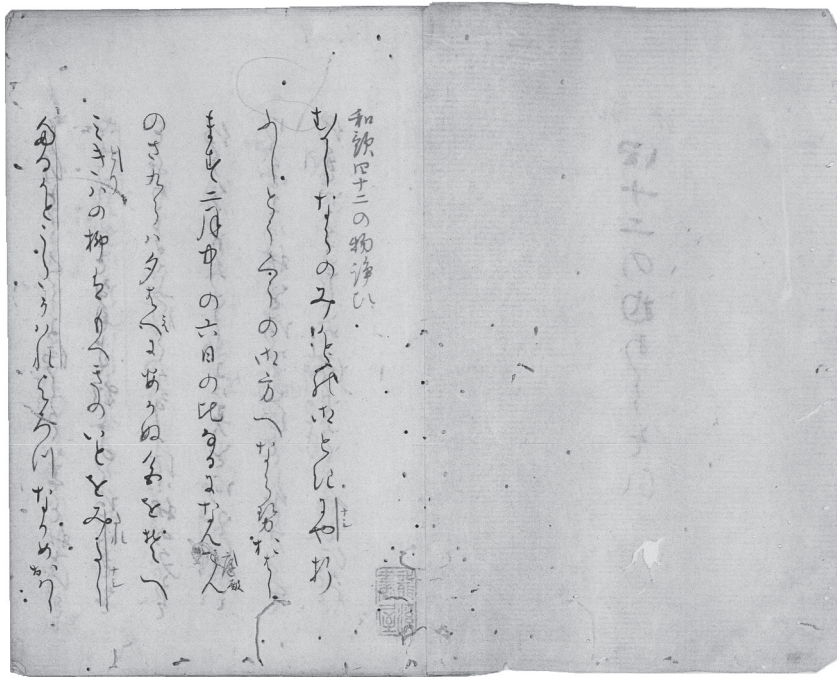
かりそめの御あそびとおもへどもこと更身にしむばかりおもしろく、
やう／＼あけがたになりゆけば御門もくわんぎよならせおはします。

ときはの大将は内侍の君のおもかけかたときもわすら(20ウ) れず、
をほしこがれ給ふ。そのうちあさからぬことにぞきこへぬ。

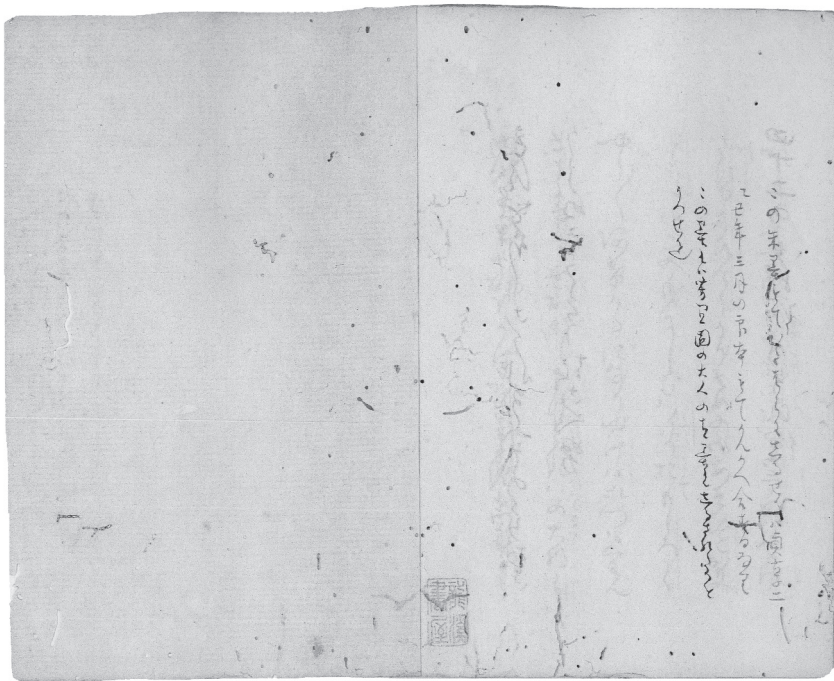
四十二のものあらそひ終(21オ)

この朱墨もてかたはらにしろせるは貞享二乙丑三月の印本もてかんが
へ合するなり。

この墨には芳宜園の大人の青墨にてしろされたるをうつせる也。(21
ウ)



〔図版1〕新出写本の冒頭部分（2才）



〔図版2〕新出写本の末尾奥書（18才）